

オレゴン大学におけるスポーツと大口寄付

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳)

“Oregon Debates Role of Big Sports Donors”

—— An article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

オレゴン大学と2人の後援者

ウィラメット川が活気に満ちた大学町（ユージーン）の中心を流れる。川の南側にはオレゴン大学（州立）のキャンパスがあり、そこではリュックを背負った新入生が大学案内図の前に集まり、また活動家にもらったチラシを見ている学生もいる。

川の向こうに大学の新しい顔が出現した。1億6千万ドルをかけて改装された超近代的なスポーツ施設レン・カサノヴァ・センターである。同センター内のガラス張りの展示品の中にはオレゴン大学のフットボール選手の等身大の像がある。そのユニフォームはオレゴン州に本部を置くナイキが2年かけてデザインしたハイテクユニフォームである。その像に守られるかのように、オレゴン大学バスケットボールチームの活躍やフットボールチームの招待試合（ボウル）出場を記念した多数のトロフィーの展示スペースがある。

大学内の教学部門とスポーツ部門間の意見の対立はますます大きくなっている。2007年1月に発行され92人の教員が署名した新聞記事によれば、大学は「優秀なスポーツ選手のための二流のトレーニングセンターになる」という危険なギャンブルをしているとある。デイヴィッド・B・フロンメイヤー学長はこの非難は「間違っている」とし、次のように言う。「アカデミックな卓越性かスポーツの卓越性かどちらかを選ばなければならないというような議論は問題を単純化しすぎています。」

オレゴン大学において教学部門とスポーツ部門がうまく共存できるかどうかは個人の寄

平成20年3月19日 原稿受理

大阪産業大学 教養部

付金と全米で最も強力なスポーツ界の2人の後援者の決断にかかっているのである。その2人の後援者とはナイキの共同創業者であり会長であるフィリップ・H・ナイト氏とオレゴン大学への大口寄付者であり2007年2月に大学のスポーツ局長に就任したパトリック・J・キルケニー氏である。彼らのような大口寄付者のおかげでオレゴン大学のスポーツの卓越性は全国的に知られている。しかし、一流の大学で構成されているアメリカ大学協会のメンバーの中で、交付される運営予算が最も低い水準にあるオレゴン大学は他の大学のスポーツ関係者が経験しないような難題に直面している。

ニール・ズームブコス氏は27年間オレゴン大学フットボールチームのアシスタントコーチを務めた。彼は2月にキルケニー氏の特別補佐役となり、オレゴン大学のスポーツ部門と教学部門とのパイプ役を担っている。2人とも大学のスポーツ部門は長いあいだ川を隔てた教学部門の同僚たちとうまくコミュニケーションが取れなかったことを認めているが、ズームブコス氏は最近の大学内のスポーツのあり方に関する熱い議論に当惑している。彼は次のように言う。「我々のやっていることが非難されるとはとんでもないことです。むしろ我々は賞賛されるべきなのです。」

1億ドルの寄付

2007年8月の記者会見で大学がナイト氏と妻のペニーさんが大学のスポーツ局に対し1億ドル寄付すると発表した時、参加者たちは息を呑んだ。その寄付によって大学の募金6カ年計画の目標額6億ドルを超え、募金総額は7億1700万ドルになる。先週、大学は教学部門への寄付金7450万ドルを受けたが、批判勢力は募金で集めたお金がスポーツに使われすぎだと非難している。募金額の約40%がスポーツのために使われる予定である。

1994年以来学長を務めているフロンメイヤー氏は、スポーツにお金を使うのは大学全体のための投資だと言う。しかし彼は、過去10年間に大学の施設の充実のために使われたお金の75%以上はスポーツのためというより研究教育や学生の活動のために使われたとも言う。彼は、多くの有名な研究大学はスポーツに秀でていると言い、更に次のように言う。「このようなことで意見が衝突してはいけません。学問的な魂を売るなどといった意見を信じてはいけません。」

ナイト氏からの寄付はタイミングが良かった。というのはオレゴン大学は最近スポーツ部門を独立採算制にするという少数派の大学の仲間入りをしたと誇らしげに宣言したのである。しかし、大学当局は、今後数年フットボールチームの成績が悪くなり収益が減少すればそれだけでスポーツ部門が再び赤字になるということを認めている。ナイト氏の寄付によってスポーツ活動で不足した分を補うことができる。その結果、さらに教学部門とス

スポーツ部門の間に壁ができることになる。

オレゴン大学は依然として深刻な財政的危機に直面している。主な理由は、築81年のマッカーサーコート（バスケットボール会場）に替わる新しいバスケットボール会場の建設に2億ドルかかるからだ。その支払いはすべて州債でまかなう予定である。大学当局は個人的な寄付や最新の設備が生み出す収益で巨額の負債を返済できると自信を持って言う。しかし、教員の多くは懐疑的である。1986年から生物学の教授を務めるネイサン・タブリッツ氏は次のように言う。「超豪華な施設を建設するために彼らはもしかすると大学の学問的未来を抵当に入れているのかもしれない。」

何が優先されるべきか

オレゴン大学はこれまでスポーツで数々の成功を収めてきた。特にナイト氏が部員であった陸上競技部は長年にわたって好成績を収めてきた。オレゴン大学は、ルイヴィル大学、クレムソン大学、オクラホマ州立大学などと同じように個人的な寄付によって一流のスポーツへの道を着実に進んできた。スポーツのための資金調達を研究しているノースダコタ州立大学のジェフリー・L・ステインソン助教授は次のように言う。「それらの大学は序列第2、第3グループの大学で、スポーツの成功で得たお金と影響力が大学運営において良い波及効果を及ぼすことを願っています。」

大学当局は、全国レベルのフットボールやバスケットボールのチームを持つことが大きな利益になるということは明白であると言う。レン・カサノヴァ・センターの2階の角にオフィスを持つキルケニー氏はこう言う。「みんな競争に勝ちたいんですよ。オレゴン以外の州でも大学の名声を得る最も強力で効果的な方法はスポーツなんですよ。」これまでオレゴン大学のスポーツ部門に多額の寄付をしてきたキルケニー氏は元保険会社の役員で、彼を批判する人々からも真っ正直な人だと云われている。彼は大学が前スポーツ局長のビル・ムース氏に支払った200万ドルの解雇金を取り戻すために雇われ、後にフロンメイヤー学長の要請で空いたポストに就いた。キルケニー氏は50万ドルの年収すべてを大学に寄付し、大学の大口寄付者となっている。しかし、彼の局長としての資質やオレゴン大学のスポーツに対するヴィジョンを批判する教員からは未だに部外者と見られている。

大学スポーツの改革を目指す全米大学スポーツ連盟の共同議長であるタブリッツ教授はオレゴン大学が大学スポーツのあらゆる弊害の縮図であると考えている。雑然とした研究室で彼は次のように言う。「われわれは大学スポーツに関するすべての問題の最先端を行っています。大学は優先順位を間違っています。」彼はパワーポイントを持ち歩き、州議会議員に統計を見せ、オレゴン大学の教育研究の質や評価の低下を示す。その具体例として

大学院生数が徐々に減少していること、教員の給与が相対的に低いこと、卒業率が低いことなどを挙げる。

フロンメイヤー学長は、教員の給与の問題や建物の老朽化など未解決の問題があることを認めつつ、オレゴン大学の教育は基礎がしっかりしており、財政問題が悪化しているのはスポーツを振興しているからではなく、州の経済状況が悪いからであると言う。州からの交付金はかつては年間経常費の32%をカバーしていたが、現在は13%にすぎない。この数字は全国平均よりかなり低い。彼はスポーツクラブが活躍するということは全国的な知名度が上がり、寄付が増え、志願者が増えることにつながると考えている。彼は更にオレゴン大学のロゴマークについて次のように言う。「あの0の一文字は今や世界的に知られたブランドです。」このロゴマークの0の外側は大学のフットボールスタジアムを表し、内側はバスケットボール会場を表している。学長は「われわれは現にスポーツクラブの活躍が教学部門に良い影響を与えているのを見てきました。」と主張する。

1981年からオレゴン大学ロースクールの教授であり、NCAA（全米大学体育協会）の教員代表でもあるジェームズ・M・オフアロン氏は、オレゴン大学のスポーツクラブのいくつかはパックテン（Pac-10：米国太平洋岸大学競技連盟）のメンバーであり、カリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学などのエリート大学と対戦している点を指摘し、次のように言う。「大学のスポーツにおける成功は世間の人々にオレゴン大学が質の高い大学であると認識してもらうのに役立っています。」

一流のフットボールチームへ

フロンメイヤー学長によれば、現在NCAAの会長であり1989年から1994年までオレゴン大学の学長を務めたマイルズ・ブランド氏をはじめとする彼の前任者たちは普通のレベルのスポーツでは投資する価値がないと判断し、高いレベルで競争するならそのためにもっとお金を使わなければならないと考えた。

1994年にダックス（Ducks：オレゴン大学のスポーツチームの愛称）に陣容が整った。その年、フットボールチームは37年ぶりにローズボウルに出場したのである。その試合には敗れたが、オレゴン大学はテレビ放送による収入や様々な寄付を得、ついにひ弱なチームではないということを証明したのである。

翌年、R・マイケル・ベロッチェがフットボールチームを率い更にレベルを引き上げた。オレゴン大学のスポーツに批判的な人々も彼の管理運営能力を賞賛した。しかし、オレゴン大学はただ優秀なフットボールチームを持つだけでは満足しなかった。もっと有名な大学になりたかったのである。そこで2001年、大学は25万ドルかけてニューヨークのタイム

ズスクエアの10階分の高さのある広告塔に当時のクウォーターバックのジョーイ・ハリントン選手を賞賛する広告を出して全国民を驚嘆させたのである。ニューヨークタイムズは社説で、広告塔で選手を売り込むのは行き過ぎた行動だと批判し、大学でスポーツが優先されすぎていると述べた。

オレゴン大学のジェームズ・W・アール教授（英文学）は長年大学のスポーツ優先主義について批判してきた。彼はオレゴン大学で20年間教鞭をとっており、スポーツに力を入れている大学の56人の評議員で構成されている全米大学スポーツ連盟の共同創立者である。アール氏はオレゴン大学のフットボールの試合の華やかさは楽しいものだと言う。彼は試合は素晴らしいと思っている。一体何の不满があるのだろうか。しかも彼はキルケニー氏をはじめとする決定権を持つ人たちを気に入っており、彼らは率直で正しいことをしていると考え。しかし彼は大学の過度のスポーツ振興は教育研究の犠牲の上に成り立っていると考える。

大学当局は、スポーツのために巨費を投じるのはそう頻繁にあることではないと言う。フロンメイヤー学長は、1億ドルをかけたオーツェンスタジアム（フットボール会場）の改修は30年に1度のことであり、2億ドルのバスケットボール会場の建設は一生に一度あるかないかのことであると言う。

アール教授は最近大学の野球チーム発足の決定に言及し、オレゴン大学のスポーツ熱が収まる気配はないと指摘し、次のように述べる。「大学にとって、教学部門よりスポーツのほうが大切なんです。私達はギリ貧になるばかりです。」

寄付金のゆくえ

オレゴン大学には40人の募金担当職員がいる。その内9人はスポーツ部門に配属されている。キルケニー氏と2001年から副学長を務めるアラン・H・プライス氏は、両部門の連携はここ数年良くなってきていると言う。しかし、プライス氏は大学はスポーツ部門への寄付金が大学全体を助けているということを世間にうまく伝えていないと指摘する。最近の本紙の報告によれば、多くの大学でスポーツ部門への支出が大きく教学部門の予算を使い込む結果となっている。しかしプライス氏はオレゴン大学ではこんなことは起こっていないと言う。彼は更に、スポーツで好成績を収めることは大学を世間にアピールすることになり、スポーツ部門に寄付する人は教学部門へも寄付する場合が多いと言う。サンフランシスコのベイエリアに本部を持つハウジングキャピタル社の会長であるデイヴィッド・M・ペトローン氏がその良い例である。彼はオレゴン大学の卒業生で熱烈的なスポーツファンである。彼は15年前にオレゴン大学のスポーツ部門に1000ドル寄付した。その後、年々

寄付額を増やし、その結果大学をより近く感じるようになったと言う。これまでの500万ドル以上の寄付のうち、半分以上は教学部門に寄付された。特に3年前の250万ドルの寄付は文理学部に対するものであった。彼はフットボールのコーチが図書館に寄付すれば2万5千ドルまでは同じ額を寄付するつもりであると言う。オレゴン大学の財団の評議員を務めたことがあるペトローン氏は「ますます多くの人たちが大学の両方の部門に寄付をしている」と言う。

ナイト氏の影響力

オレゴン大学におけるスポーツと寄付の話になると必ずナイキの会長であるナイト氏の名前が上がる。これまで総額約80億ドルを寄付してきたナイト氏はオレゴン大学に大きな影響力を持っている。彼は時々オーツェンスタジアムの豪華な特別席に顔を見せるが、いつも大きなサングラスをかけておりインタビューには応じない。ナイト氏は2007年の1億ドルをはじめこれまでオレゴン大学に巨額の寄付をしてきた。フットボールスタジアムの拡張工事やフットボールの屋内練習場建設のための寄付、陸上競技部への支援以外にも彼は大学図書館やロースクールの校舎のために5240万ドルを寄付し、それ以外にも教員のポストも寄贈した。彼のオレゴン大学教学部門への寄付額は歴代第2位である。

ナイト氏のキャンパスでの大きな影響力は良く知られている。彼は定期的に大学の幹部やスポーツクラブの監督と会談しており、寄付金の影響力が行き過ぎだと批判する人もいる。例えば、フットボールの試合中に彼は監督の作戦の指示を聞くためにヘッドホンをつけるといううわさもある。

しかし、ナイト氏と母校オレゴン大学との関係はずっと良かったわけではない。2000年の4月、オレゴン大学がWRC（労働者人権協会：工場の労働環境を監視する非営利団体）に加盟したとき、ナイト氏はオレゴン大学と絶縁状態になりそれが17ヶ月間続いた。その時ナイト氏は前スポーツ局長のムース氏と激しく対立したのである。ナイト氏は2005年、『ザ・オレゴニアン』紙で次のように述べている。「ビル・ムース氏は10回正しい判断をするチャンスがあったのに、そのチャンスをすべて逃しました。あんなに完璧に間違えるのはなかなかできないことです。」

2006年8月にナイト氏は母校であるスタンフォード大学ビジネススクールに対して1億500万ドルの寄付をした。オレゴン大学の中にはこの巨額の寄付は、ナイト氏がオレゴン大学を良く思っていないという明らかなメッセージだと受け止めた人もいる。高額なバスケットボール会場の建設は無理だといわれていた。しかし、キルケニー氏が2月にスポーツ局長に就任して以来、オレゴン大学とナイト氏との関係は再び良好になっているように

思える。

人気のあるフットボール

先月 (2007年 9月) のある晴れた木曜日, ESPN (スポーツ番組専門ケーブルテレビ局) は大学フットボールデーという番組のためにオーツェンスタジアムの近くで中継用のセットを設営していた。この人気番組はフットボールのシーズンに各地の大学を回るものでオレゴン大学に来たのは2度目であった。その試合に対する期待が高まり, 多くの学生がナイキのマークの入ったオレゴン大学のフットボールのユニフォームを着ていた。

アリー・グラスグリーンさんはオレゴン大学の2年生でジャーナリズムを専攻している。彼女は学生新聞『オレゴン・デイリー・エメラルド』に教学部門とスポーツ部門間の緊張関係について記事を書いた。強敵のカリフォルニア大学バークレー校との試合を48時間後に控えていたその木曜日に, 彼女は, 多くの人はオレゴン大学の教学部門のことを真剣に考えないでスポーツ大学としか見ていないのではないかと心配していると言った。

グラスグリーンさんはオレゴン大学がスポーツに力を入れているために財政的にも学問的名声についても危険な状態にあることを良く知っているが, そのプラスの面も認めている。彼女はオレゴン大学を選んだ理由の1つとしてそのフットボールチームの存在があったと認めているのである。

(2007年10月26日号)

(Copyright 2007. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission. The complete English-language version of this article is available on *The Chronicle of Higher Education* website at: <http://chronicle.com>)

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はポール・フェイン氏である。

今回取り上げたのはオレゴン大学におけるスポーツと寄付金に関する記事である。オレゴン大学は訳者が1999年から2000年にかけて1年間客員研究員として在籍した大学であり, なじみのある名前が多数登場し, 強い親近感を持って訳すことができた。

アメリカの大学で高い収益をあげるスポーツはフットボールとバスケットボールである。ホームゲームは一大イベントであり, 会場は学生, 教職員, 地元の住民らで埋め尽く

され、熱狂的な応援が繰り広げられる。翌日の地元の新聞や大学新聞に試合の詳細が報道される。まさにビッグビジネスなのである。

寄付金はアメリカの大学の収入の大きな部分を占める。本記事ではそれが教学部門へ行くか、スポーツ部門へ行くかそのバランスの問題を取り上げている。大学にとっては両部門に多額の寄付金が入るのが理想である。収入の大部分を学生納付金が占める多くの日本の大学にとってはなんとも贅沢な悩みのように思える。